

国際文化フォーラム『「I love you」って「愛している」?』

—翻訳の現場—

## 人はなぜ鶏を飼うのか?

小川 雅 魚

たしか二〇〇五年、日本における独占翻訳権が切れたらしく、夏から秋にかけて、フランスの作家サンテグジュペリの *Le Petit Prince*、それまで五〇年以上にわたって『星の王子さま』の名でロングセラーを続けてきた小さな物語の、あたらしい日本語訳がまさに雨後のタケノコのように次々と出版された。最初に出たのは小説家の倉橋由美子のものであったと記憶する。『バルタイ』や『婚約』、『聖少女』など、その斬新な文体と毒にひかれて高校時代に愛読し、後年の『大人のための残酷童話』も昔のよしみで付き合ったが、題名のわりにはかつての鋭い毒が薄れていて、倉橋老いたりの印象が強かった。その倉橋由美子が『星の王子さま』を訳したというのが驚きだった。もちろんすぐに購入したが、残念ながら倉橋さんは、この翻訳を遺作として出版直後に急逝してしまった。

そのほか、永年サンテグクスを研究してきた大家の訳業もあったし、新進の研究者の意欲的な翻訳。変わったところではコラムニストの辛酸なめ子の超訳も出た。小説家では池澤夏樹も単行本と文庫本、同時出版の形で参入している。その夏、十数冊が出版されたが、

わたしはすべて購入した。ある一文がどう訳されているか、ただそれだけを見るために。

教室で勉強するのは大嫌いなのに、高校時代ラジオ講座でフランス語をかじって、大学入学後はもちろん第二外国語としてフランス語をとった。とったと言っても教科書を買って、作家のなだいなだの奥さん、ルネ・ラガシユさんの授業に数回出ただけで、あとは独学。教科書をひと通り読むと、ご多分にもれず、渋谷の大盛堂にいてペーパーバックの *Le Petit Prince* をもともとめて、辞書を片手に読みはじめ、何日かかったか忘れたが、なんとか読了した。その本は今もどこかにあって、数年前になつかしくページを繰ったことがある。書き込みもあまりなく、ページも黄ばんではいたが汚れはなかった。くり返し読んだわけではない。語学的には難しくなかったし、ここは良いなと思う箇所もいくつかあったが、全体としては、これが『星の王子さま』か、くらいの印象だった。

当時くり返し読んだのは、アルチュール・ランボーだった。小林秀雄は神田で出会ったというが、わたしがこの天才詩人と出会ったのは新宿紀伊国屋の洋書売り場。いくらフランス語が読めるようになって、新宿にでかけたおりに立ち寄ったのだが、ふと手に取った空色の表紙の安価なリーブル・ドゥ・ポエシユに、頭を殴りつけられたような衝撃を受けたのだ。以来二ヶ月、寝ても覚めてもランボー、ランボー。『地獄の季節』は暗誦するほど読んだ。『*l'avis, si je me souvien bien, ma vie était un festin*』、夢の中にまでその詩のリズムが追いかけてきた。言葉の本質は意味よりもリズムではないの

か、そう思うようになっていた。小林秀雄にも、金子光晴にも、栗津則雄にも、そのリズムを日本語に移すことはできない。オレが訳すしかない。熱病に罹ったように今思うと稚拙な訳文をノートに書き綴ったものである。「おれの記憶が確かなら、おれの生活は饗宴だった……」汗顔の至りだが、当時はもちろん本気だった。

しかし一年ほどで熱病はおさまり、もう少し穏やかなものをついいうことで、ふたたび『星の王子さま』を今度は日本語で読んでみた。もちろん名訳と評判のたかい、そして当時はそれしかなかった、北原白秋の友人だった内藤濯の本である。よくこなれた、いわゆる名文なのだろうが、なんだか靴の上から痒いところを搔いているようで、もどかしくて要領を得ない。二十歳を過ぎて改心し大学を卒業することにして、すっかりご無沙汰して忘れかけていた英語をもう一度勉強し直す過程で、フランス語の原作より先にニューヨークで出版されたという Katherine Woods の英訳も読んだ。やはり同じような印象だった。それでもどこか惹かれるところがあって、本屋で『星の王子さま』あるいはサンテグジュペリについて書かれた書物を見つけると、性懲りもなく買いたため、暇があれば少しずつ読んできた。

一昨年の夏、引越しのために、ゴミ屋敷のような研究室の雑多な本の山を学生たちといっしょに整理していたら、オレンジ色の表紙の薄っぺらな洋書が出てきた。Il Piccolo Principe、イタリア語の『星の王子さま』である。ページを繰ると書き込みがある。わたしの筆跡で、どうやら読了しているようだ。そういえば途中で放り出

したが、四半世紀も前にイタリア語をかじったことがあって、すっかり忘れていたが、その頃に読んだものらしい。

また、評論は概してあまり読まないのだが、心理学的、社会学的、もちろん文学的解釈を何冊かにあたって読んでみた。やはり、なるほどね、くらいにしか思わなかった。

ところが十二、三年前、当時週一くらいの頻度で通っていた丸善の洋書売り場で、新訳の『The Little Prince』を見つけたのである。翻訳者の名は T. V. F. Cotte、これでは男性か女性か判らない。しかし、とにかく購入して帰宅、すぐに読んだ。眼から鱗が落ちるとはこういうことであつたか、永年のもやもやが消え去った。

第二十一章、有名なキツネが出てくる場面である。王子さまはキツネに「いっしょに遊ぼう」と呼びかけるが、キツネは「おれ、飼いならされていないから」と言つて断わる。そして何を探しているのかと訊き、王子さまが「人間を探している」と答えると、次のように言う。

Les hommes, ils ont des fusils et ils chassent. C'est bien gênant! Ils élèvent aussi des poules. C'est leur seul intérêt.  
Tu cherches des poules?

問題は、C'est leur seul intérêt. である。内藤濯によると、

「人間てやつあ、鉄砲てつぽうもつてて、狩かりをするんだから、おれたち、

まったく手も足もでないよ。ニワトリも飼ってるんだが、それよりほかには、人間でやつにや、趣味しゅみがないときてるんだ。あんな、ニワトリをさがしてるのかい？」

leur seul intérêt を人間たちの唯一の趣味と解釈している。Katherine Woods のこれも永年にわたって定番だった英訳では、いわば横滑りで、It's their only interest。やはり「彼らの唯一の趣味」である。これではなんだか隔靴搔痒、しつくりしない。いや、むしろ変である。五年前に簇生したあらたな日本語訳もほとんどが、池澤訳と小島俊明訳をのぞいて、同じような解釈だった。たとえば、倉橋由美子だとうだ。

「人間は鉄砲を持っていて、狩りをするんだ。まったく困ったもんだ。鶏も飼っている。人間はそんなことしか興味がないんだ。あんた、鶏を探してるのか？」

フランス文学者らしい三野博司の翻訳だとうなる。

「人間たちは」とキツネは言った。「彼らは猟銃りやうじゆうを持っていた狩かりをする。厄介やっかいなことだよ！ 彼らはまたニワトリを飼かっている。彼らのただ一つの関心事かんしんじってわけだ。君は、ニワトリを探しているのかい？」

仏辞典で intérêt をひくと、ce qui importe とある。「意味をもつこと」あるいは「関心をもつこと」とでもしておこう。そして Cuffie の英訳を見つみよう。

"People" said the fox, "they have guns, and they hunt. It's a great nuisance! They also raise chickens. That is the only interesting thing about them. Are you looking for chickens?"

ここを読んだとき、大袈裟に言えば、わたしの中でコペルニクス的転回が起った。leur seul intérêt が「彼らの（人間として）唯一関心を持つこと」から「彼らの（すること）唯一（われわれ、キツネが）関心を持つこと」へと大きく意味の変容をとげたのである。一本の補助線が幾何の難問を氷解させるように、わたしの頭をおりに触れてだが、三〇年近くおおってきたまやまやがこのとき、豁然かつぜんと晴れ上がった。

どんな生き物も自らの生存に有利なものはそれを取り入れ、不利なものは排除しようとする。それ以外のものは関心の外、背景に退いて意味を持ってこない。いわば世界の構成要素ではないのである。肉食動物であるキツネにとってニワトリは、取り入れたいもの、つまりぜひとも捕食したい獲物である。キツネの世界を構成する大きな要素、強い意味を持つものである。ウイトゲンシュタイン風に言い換えると、（キツネにとつての）世界とは、（キツネに）関わってくる事柄のすべてである。

人間という生き物の近くにはしばしば、このニワトリが群棲する場所がある。獲物をもとめて山野をあちこちと徘徊しなくても、人間の近くへ行けばニワトリがいる。その意味では人間はキツネの生存にとってポジティブな存在である。しかし人間という奴は、キツネがニワトリに近づくこと鉄砲という物騒なものをぶつ放す。その意味ではネガティブな存在といえる。ニワトリを飼っているから近づきたいし、近づくこと鉄砲で撃たれるかもしれない。

引用部分の文章は、キツネがキツネの世界像を述べたものであって、人間がニワトリを飼うことを、人間の視点から「趣味」などというからしっこりこないのだ。人間がキツネにとって意味を持っているのは、唯一ニワトリを飼っているからなのだ。人間といえば、キツネにはすなわちニワトリなのである。だから星の王子さまが人間を探しているときいて、ニワトリを探しているのか、と付け加えてしまうのだ。

「人間か、人間ってやつは鉄砲を持っていて、狩りをするんだよね。まったく困ったものさ。でも、ニワトリを飼ってもいて、そこが奴らの唯一の取り柄さ。きみ、ニワトリをさがしているの?」

形式的にいうと、この文章はじつは対句構造になっていて、前半のネガティブ部分の重量と後半のポジティブ部分の重量とがニワトリを支柱にして両の天秤で均衡を保っている。Eitbetを「取り柄」とすることで弥次郎兵衛のように微妙にバランスがとれて読んで安

定ししくりくるが、しかし、「趣味」ととってしまったのはポジの方が軽くなって均衡が崩れてしまう。そしてこの均衡が、この章の後半に出てくる、星の王子さまの金髪と風にゆれる麦秋の麦畑との関係述べるエピソードへと、さらには薔薇のエピソードへと有機的につながっていくのである。そしてこの小さな物語がじつは見かけほど単純ではない、いくつもの主観がからみあった重層的な構造を持つ迷宮であることが見えてくるのだ。

人はなぜ鶏を飼うのか? もちろん卵をとったり、その肉を食べたりするためである。しかしそれは人間中心の視点であって、キツネの視線から見れば、当然のことながら、同じ事態がちがった風に見える。人間の近くにはたくさんさんの鶏がいて、うまくやったら都合のいい猟場だ、しかし失敗したら鉄砲という物騒なものをぶつ放される。キツネにとって、もちろん人間にとっても、とかくこの世は「おもいどおりによ、いかないもの」なのである。

## 読者のほうを向いて訳す——解釈と翻訳

鈴木 仁 子

ドイツ語の翻訳をやりはじめてから十五年ほどがたつ。いろんな種類の翻訳をやってきた。ジャンルというなら小説、絵本、エッセ

イ、手記、学術論文。対象とする読者別なら、児童文学やヤングアダルト文学、大人向けのいわゆる純文学と、よくいえば多岐にわたるが、実際のところまったく節操がなく、来た仕事はたいていこれもご縁だと受けとめて、よほどのことがなければ断ることもなくやっている。だがいろんな種類のテキストを相手にすることで、学んだものは大きい。そのひとつが、「読者のほうを向いて訳す」ということだった。

十年ほど前にはじめて児童文学を訳した。小学校の三年生か四年生ぐらいを対象とした子ども探偵団の物語で、めつぼう明るい、悪くいえば毒にも薬にもならないようなシリーズだったが、それまで大人向けの文章しか訳したことがなかった私には新鮮な体験だった。「はじめの十頁だけちよつと訳してみて」と編集部にいわれて出したときの原稿が残っている。提出した原稿に、若い女性編集者さんによる鉛筆書きのアドバイスがぎっしりと書き込まれて戻ってきたものだ。そのコメントの量の多さと細かさにおどろいた。大人向けの厄介な文学を訳すときには、訳文に対して編集者からの書き込みがあることなどほとんどないのに、これはいったいどうしたこと。だがコメントを読むうちに、深く納得した。そしてこのとき、目から鱗が落ちた思いがしたのだった。

たとえば私は、やたらえばっていて、リーダー風を吹かせたがる探偵団の団長（といってももちろん子どもだ）のセリフをこう訳した。団員が宝の地図らしきものを見つけたときに、団長が発する言葉。

「形式はほんものだな。見りゃわかる。ちよつと貸して」

編集者は、「貸して」のとなりに「（貸せよ）？」と書き込んでいた。わずかな違いだが、空いばりをするリーダーには、この横柄な命令形が似つかわしい。ささやかなニュアンスが子ども同士の力関係をありありと示す。変えたとたんに、場面にいっぺんに生氣が出た。

おなじ人物のセリフで、

「おれら、たつたいままでゲームで宝探しをやってたろ。そしたらこんどは本物の宝の地図だ。うっそお！」

これには、「うっそお！」のとなりに「（すげえ！）」とあって、（この方がこの子っぽくないですか？）とコメント。なるほど、ほかの子どもより一段上に立ちたいリーダーのセリフとしては、「うっそお！」では驚きが素朴すぎる。ここはやっぱり「すげえ！」であるべきだ。

あとから気づいたのだが、私は、べつの箇所でもこの少年に「うっそお！」といわせていた。じつに芸がない。「おまえら、見た？」カレが大声でわめいた。声がうわずっている。「いまのボルシェ・カブリオだぜ！ うっそお！」この「うっそお！」には、「（マジかよ！）」とする？とコメント。「うっそお」も「マジかよ」も、信じられないものを眼前にしたときの感嘆の言葉だが、やっぱりこの少年ならこうでなくてはならない、と納得した。ただ翻訳者の年齢からすると、この手の若者言葉に寄り添っていくのはなかなか苦しいところではある（もちろん、新しければいいというものではない。流行は

すべからく廃れるからだ)。

この稿で編集者のアドバイスをいちいち列挙するのはやめておくが、ともかく、素直に編集者の助言にしたがってみたら、いっぺんに作品が生きて動きた。のっぺりとした表情しかもつていなかった登場人物が、それぞれ個性のきわだつ子どもたちになり、それとともに私にとつてもなんとも愛らしい存在感をもつて心に迫ってきたのである。ちなみに、この最初の十頁の試し訳によって、私もおおいに学んだ。続きはノリノリで訳せて、幸いにも残りの頁にはもう注文がつかなかったのだから。

大人の文学では拍子抜けするくらいすんなり訳文がおつてしまふのに、子どもの文学ではどっさり注文をつけられる。そのとき思ったのが、児童文学のほうがある意味でむしろ文章への注文がきびしいということだった。子どもというのは、待ったなしの、容赦のない読み手だ。おもしろくなかったり、わからなかったりすれば、たとえ途中で放りだしてしまう。

つまりは、翻訳であるかにかかわらず、作品が自立した一個の「日本語文学」として魅力的でなければ立ちゆかないのだ。原作をどう読みこむかだけではなく、読み取ったものをどう「日本語文学」として自立させるか、それが肝心なのだった。考えてみれば、あたりまえのこと。だがはじめて身に沁みたのが、このときだった。そしてそれは、いま取り組んでいる要求度の高い文学の翻訳にそのまま役立っている。「読者のほうを向いて訳す」というのは、右のような意味のつもりだ。読者におもねるということではなく、受け手

に届けることを願う書き手としての、翻訳者の役割ということをも思った。ひとつの作品世界が生き生きとした力あるものになるかどうかは、翻訳者が作品を日本語文学としていかに創造するかにかかっている。むろんそれは、こなれた日本語を書けばいいということと意味しているのではない。

翻訳は演奏にたとえられることがある。外国語の原作は、いわば楽譜のようなもの。音符が読めなければ、楽譜はたんなる紙切れにしかすぎない。翻訳者が「演奏」してみせて、はじめて生きた音色となつて聞く人の耳にとどく。とつとつとした演奏もあれば、流れるような演奏もあるだろう。「誤訳」という名のあきらかに間違つた演奏も、避けられるものならば避けたいものの、とうぜん生じうる。楽譜を読むことのない聴衆にとつて、演奏者がつくりだす音楽だけがすべてだ。どの音符も正確に演奏する技量もさることながら、「解釈」という行為がおおいにものをいう。編集者のアドバイスが私にとつてなによりも説得的だったのも、彼女の提案が人物の性格や場面をきちんと読みこんだうえでの「解釈」の行為にもとづいていたからだ。解釈のいかんによって、作品は色合いを変える。そして「絶対に正しい演奏」というものがないように、「絶対に正しい翻訳」もまたありえないのだ。

正しい翻訳はない、とはいっても、演奏とおなじく翻訳の場合も訳者が作品を勝手気ままに変えていいわけではない。そこは作者とまったくちがうところ、あくまでもテキストに奉仕する身だ。書かれている意味を伝えることはもちろん、原文がどんな表現をとつて、

どんな抑揚でどんな気配のもとに語られているのか、あたうるかぎり目を皿にし、耳を澄ます。原文がごつごつしていれば、ごつごつした手触りを訳したいし、スピードでぐいぐい押してくる文であるなら、翻訳文もまた疾走していきたい。言葉が音を奏でているような原文なら、その音色をできることなら日本語でも響かせたい。つまりは意味の伝達にとどまらず、作品世界をそのトーンごと、気配ごと訳したいのだ——もしできるものなら。「解釈」とは、そのような行為をもさしていると思う。

一字一句たりともゆるがせにはできない。かといって「木を見て森を見ず」というがごとく、逐語的な把握に拘泥して、テキスト全体を見失ってはならない。しかしまたその一方で、枝葉末節にこだわりぬいて、言葉のありようを厳密に吟味しないかぎり、森全体もまた見えてこないのがまたふしぎというもの。細部に神宿る。全体と細部、意味とかたちの力学には、微妙なバランスが求められる。

そうやって読みながら、書いていく。すべてを自分の中に落としこんだ（と思いこんだ）うえで、読者という受け手にむかって、日本語として自立したひとつの世界をつくりだす。翻訳とは、原典テキストと日本語テキストの間をはてしなく行き来しながら、表現を模索するといえるだろう。だがテキストにどんなに誠をつくしたつもりでも、解釈のうえにのみ成り立つ翻訳は、けっして原作のものではない。「翻訳者は反逆者」、まさしくそのとおり。打ちこんだ翻訳ほど、一冊訳し終えた後には「作品を乗っ取ってしまった」という思いに駆られて、いてもたってもいられなくなる。全権

委任されたのに、濫用してしまったような居心地の悪さ。内心とてもなく忸怩<sup>じくじ</sup>としていて、ほんとうは原作に顔向けできない。翻訳の宿命だろうか。だがそれでも、言葉をなめるように味わうこの喜びからはとうぶん抜け出せそうにない。

（本稿は二〇〇五年に『糸菊』に発表した原稿に加筆したものです）。